

氏名	林 延修
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 10186 号
学位授与年月日	令和 4 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	日韓両言語における外来語の受容に関する対照研究

主査	筑波大学 教授	博士（言語学）	矢澤 真人
副査	筑波大学 准教授	博士（言語学）	橋本 修
副査	筑波大学 助教	博士（言語学）	田川 拓海
副査	筑波大学 教授	博士（言語学）	小野 正樹

論文の要旨

本論文は現代日本語・現代韓国語における外来語の借用実態を量的・質的に調査分析し、両者の異同を捉えることで日本語と韓国語における借用語の受容システムを解明する語彙論研究である。

本論文は以下の6章からなる。

第1章 序章

第2章 先行研究の概観と本研究の位置づけ

第3章 国語辞典と新聞にみる日韓の定着外来語の実態調査

第4章 日韓の外来語の文法的派生に関する考察

第5章 日韓の新着外来語に関する考察

第6章 結論

第1章では本研究の背景・目的について述べられる。まず、語種についての日本語・韓国語における捉え方について、固有語・漢語・外来語という大きな3区分が存在するという点で共通の枠組みを持つことが確認されたうえで、本研究の主目的が、日本語・韓国語に定着した外来語について、品詞的な側面から量的な実態を明らかにすること、日本語・韓国語における外来語の述語動詞化・文法的派生について比較すること、日本語と韓国語において外来語受容の初期段階での状況を明らかにすることにより、両言語の外来語受容の異なりを要因を検討することの3点であることが示される。

第2章では、本研究に関連する先行研究を検討し、それらの研究の流れが本研究とどのような関わりを持つかが述べられる。まず、先行研究を、借用語における日韓の品詞の文法的変化に関する研究、外来語の量的分布に関する研究、外来語の動詞述語化に関する研究、外来語由来の新語と言い換え語に関する研究の4つに分けて、それぞれに批判的な検討が行われる。これを踏まえ、借用語の品詞派生について本研究では文法的派生と接辞による語彙的派生の区別を明確に行うこと、日本語・韓国語間の量的比較のために適切な資料として同規模の両国語小型辞典と大規模新聞コーパスを用いること、分析対象として外来語の動詞派生パターンを網羅し自他の異なりも射程に含めること、外来語の初期における受容過程の分析が重要であることの4点が具体的なアプローチとして示される。

第3章では日本語・韓国語における、定着外来語の実態調査と分析が、主として両言語の国語辞典と新聞コーパスを用いて行われる。まず、両言語の国語辞典を用いた調査が行われ、出版年度と収録語数の差が少ない『明鏡国語辞典』と『*Yensey hankwuke sacen* (延世韓国語辞典)』を資料として選定したのちに、両辞典における外来語の量的な比較がなされる。その結果、日本語における外来語の割合が韓国語より高く、品詞のバリエーションも多いこと、名詞から動詞・形容動詞への派生が行われやすいことが指摘される。ついで、新聞コーパスの調査が行われ、上記の辞典と時期の近い新聞電子データとして『毎日新聞』と『*Tonga ilpo* (東亜日報)』が選択され、両者のデータ規模を揃えたサンプリングを構築した上で、比較・検討が行われる。その結果、辞書における収録外来語が新聞コーパスに出現する比率は、日韓両語でほぼ差がないこと、語別の出現頻度で見た場合、韓国語の方が頻度の偏りが大きい(特定の語が集中して頻用される)こと、名詞から動詞への派生が行われた外来語の出現頻度は、日本語の方が高いことなどが明らかにされる。

第4章では、両言語における外来語の文法派生について、動詞述語を中心に分析される。まず、分析の前提として、日本語においても韓国語においても外来語動詞は外来語名詞からの派生によって成立していること、両言語とも派生の方式が、「外来語名詞に動詞化接辞を付けるもの」「外来語名詞にヲ格等の格助詞を挟んで動詞化接辞を付けるもの」「外来語名詞にヲ格等の格助詞を挟んで機能動詞を付けるもの」の3種に分けられることを示した上で、両言語における動詞派生の分析が行われる。この結果、動詞述語化に関して、日本語では「外来語名詞に動詞化接辞を付ける」という、語彙的依存度が低い手法による派生の出現比率が高いこと、両言語とも、動詞化・非動詞化に関する原語の品詞性からの影響は小さいが、日本語の方が若干動詞性を残しやすいこと、日本語では、外来語動詞は自動詞と他動詞がほぼ同程度使用されるのに対し、韓国語では他動詞に偏って使用されることなどが明らかにされる。第3章の結果と合わせて、これらの傾向は、定着外来語と新着外来語との間で大きな差がないことも確認される。

第5章では、主として新型コロナウイルス関連外来語を材料に、日本語・韓国語における新着外来語の定着プロセスについての調査分析が行われる。まず、調査対象データとして、『毎日新聞』と『*Tonga ilpo* (東亜日報)』の2020年1月～12月の記事から、キーワード検索や他の報道資料との照合を経て、新型コロナウイルス関連外来語として、日本語で異なり語数22語・延べ語数1380語、韓国語で異なり語数26語、延べ語数1069語が抽出される。これを元に、固有語・漢語等の言い換え語も含めて、両言語における時間的な量の推移を分析し、新型コロナウイルス関連外来語の総量は、日本語と韓国語との間で差は見られないこと、時間的な変化の点で、日本語では外来語が言い換え語に取って代わられることが少ないのに対し、韓国語では時間経過とともに固有語・漢語などの非外来語の言い換え語に取って代わられる頻度が高いことが明らかにされる。

第6章では本論文の考察をまとめ、残された課題と今後の展望が述べられる。

審査の要旨

1 批評

現在まで、語種一般についての語彙論的研究、借用についての質的な記述研究は、日本語研究においても韓国語研究においても、一定の蓄積はあるが、両言語における外来語の対照研究や、借用の実態に関する考察は、十分とは言えなかった。本論文は、日韓両言語の外来語の共時的実態について、確実な実態把握と分析を行った上で、両言語の比較と検討を行ったものであり、今後の研究に対し、多くの重要な知見を提供している。特に、以下の3点は、今後の研究に対して大きな影響を与えることが予想される。

第1点は、基本的な実態として、日本語において外来語が語彙全体に占める割合が、韓国語のそれよりも多いということを、明確な量的なデータをもって初めて示したという点である。韓国語よりも日本語の方が

外来語の語彙的比率が若干高いのではないかということは、学界以外の素朴な感覚として語られることはあったが、言語学的に十分に信頼できる形で計測されたことはなく、本研究の適切な資料選択、サンプリングによって、初めて明確な数字として示された。まず、この点を高く評価したい。

第2点は、両言語における外来語使用の実態について、総量だけでなく、部分における異なりについても発見が得られた点である。特に、日韓両言語の相違として、外来語の使用実態において韓国語の方が特定の語に偏り、日本語においては比較的まんべんなく異なり語数が得られるということと、日本語の方が名詞から動詞への派生に関して「外来語名詞に直接動詞化接辞を付ける」比率が高く、韓国語では「外来語 ul+hada」や「外来語 ul+機能動詞」という外来語の名詞性を保つ表現の比率が高いということの2点は、重要な指摘である。前者は、外来語受容のすそ野が日本語の方が広いという語彙的な側面を示唆し、後者は、日本語においては、文法的な手段による外来語動詞の生産力が高いという、外来語の相対的な分布特徴を示す指摘である。

第3点は、外来語の初期導入時期におけるふるまいを、時間的推移を含めて詳細に調査・観察することにより、両言語の外来語定着に関わるプロセスの実態を解明した点である。2020年1月から12月の1年間に集中的に現れたコロナウイルス関連の外来語と非外来語の言い換え語との時間軸上の量的推移を観察することにより、日本語における外来語は、言い換え語によって分布を減らすことがほとんどないのに対し、韓国語においては、いったん導入された外来語が非外来語の言い換え語に取って代わられる形で分布を減らしていくことが、明確なデータによって明らかにされた。この導入・定着期における置き換え現象の差は、韓国語に比べて日本語の外来語比率が高いことを生じさせる有力な要因である可能性が高く、貴重な現象観察であるといえることができる。

一方、本研究の課題としては、日韓両言語における外来語分布の異なりの要因に関する全貌までには至っていないという点が挙げられる。両言語における共時的な分布の量的実態についてはほぼ包括的な記述に成功し、その分布実態の要因の一部についても、導入・定着期における言い換え語の問題があることは明らかになったが、日本語における外来語の使用頻度の高さの要因のすべてが示されたというところには至っていない。両言語の過去の外来語の受容実態に関する調査・分析など、課題も残されている。しかしながら、学界の現況をみるに本研究の成果は十分に画期的であり、残された要因解明の問題は、本研究の貢献・重要性を揺るがすものではないと言える。

2 最終試験

令和4年1月26日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。